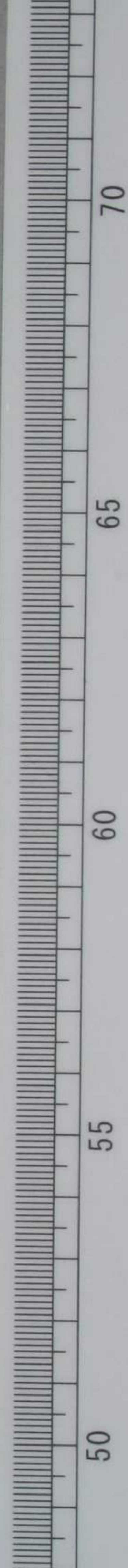


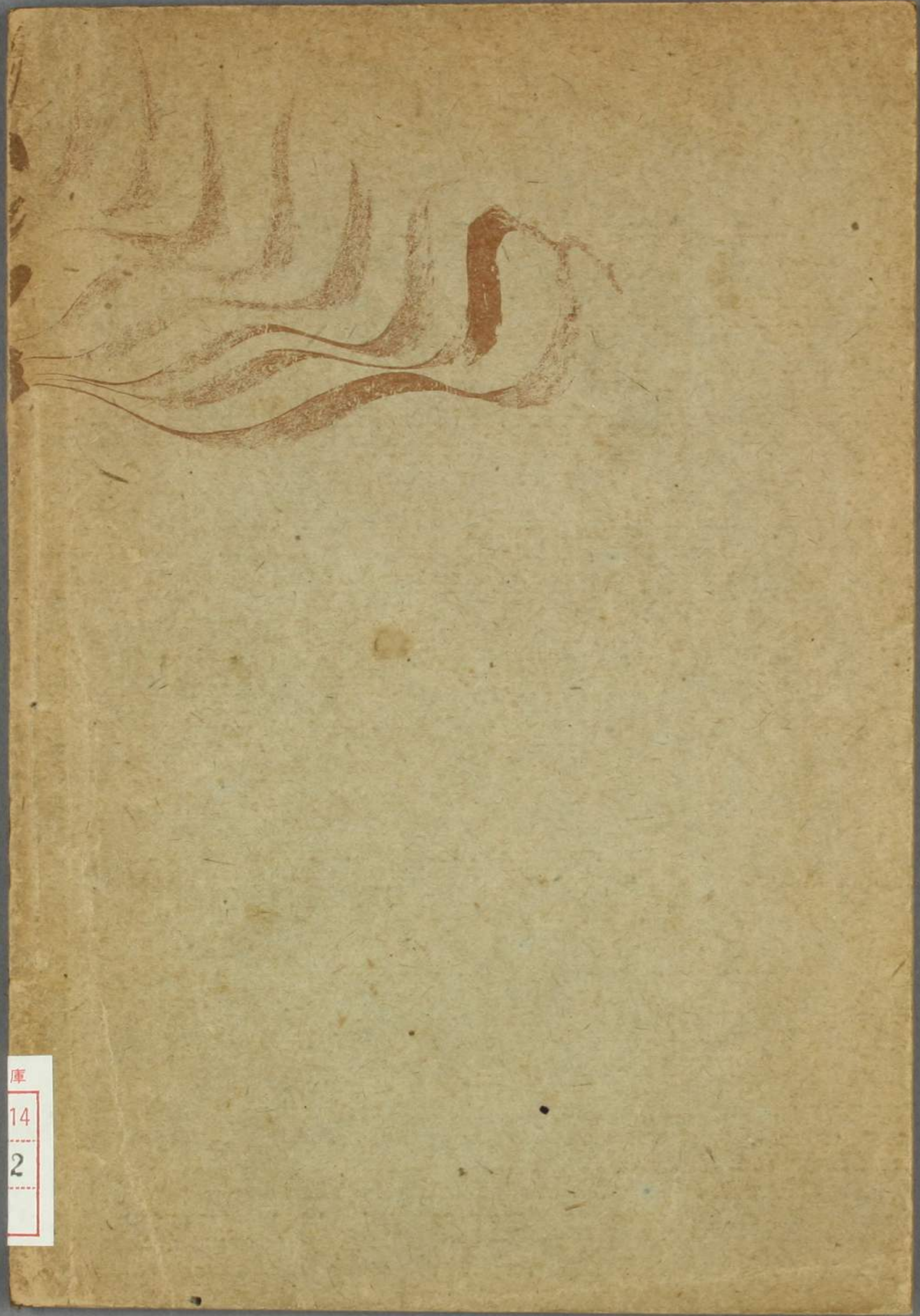
本所
文
D



問文

庫

20



庫
14
2



夜清集

錦雲題

招魂賦 李青蓮 大雅堂 天狗舞 浪童と 嚴島 三尻 千代の松原 大宰府 熊本城 耶馬溪 内海行

目錄

十一 十八 二十七 三十二 三十三 三十六 三十七 四十四 四十五 五十二 五十七

文庫14
D 202

高野山 和歌浦 都の歌 三十六峰 落瓦賦 嗟峨野 鬪骸盃 天馬賦

六十一 六十二 六十三 六十八 七十三 九十三 九十七 百二

目三

夜濤集

招魂賦

月郊散人作

我は天地に客となり
月にうそふき雪に和し
處定めすかけめぐる
名も年も無き夢人なり
こぞの秋よりいにしへの
都の花に遊ひしが
都の人には飽きたれば
あづまのかたへたどるなり
花の都もしばらくは

花の香も無き冬の
何を慕ふて来る雁に
我はかはりて出て行く
關に關守る琵琶法師
名の響きて影も無き
闇のみづうみ打ち渡り
眠る朝日をまつばらや
賤が嶽吹くこがらしに
草も争ふ關か原
岐阜に香は殖ゑたれど
醉ふ間短き酒の味
名古屋の城に雲落ちて
散るは葵か大鳥毛

はさま破れて三河より
白き野末は遠江
中走り行く天龍の
つばさ借りたき世の中に
道は幾たびまた越ゆる
いのちあやしき小夜の山
あとも行く手も降り埋む
雪も氷も山水も
流れ争ふ大井川
今も人無き字津の谷の
うきはうつゝか夢さめて
駿河の國に立ちにけり
雪は止みぬ

風も止みぬ

見渡せば山白し

海白し天白し

そよや招かん山の魂

海の魂天の魂

出てよ共々語らばや

おもひくを云へ聞かん

山の魂

さわがしやさわがしや

時の小魔のあと追ふて

處のひとやかかけめぐる

人てふものぞさわがしき

いかにいっまで騒くとも

ひとやは堅く魔は早く
 及はぬものをかけろふの
 印度の國は今いかに
 グリイスもまた花散りて
 羅馬は畫師の筆となり
 セントパウルの壞るゝを
 想ふものさへひとりかは
 二世と續かぬ秦皇の
 城は万里と延はしゝも
 嵐一時飛ひかへる
 野山かけ行くボナパ
 五十年の長旅の
 はては苦しき戸に笑ふ

小魔の聲も聞かざらん
昔が今に幾人か
死しては生れ生れては
死する爲にや生るらん
生る爲にや死して行く
生死の中のさわがしさ
静なるもの無きや無き
我に似たるは無きや無き
海の魂
騷かさはわげ立たは立て
騷かはさわげ立たは立て
城と誇れるいくさぶね
唯一打に沈めなん

天を侮るたかどのも
唯一打に碎かなん
町も都も國郡
唯一打に拂はなん
騷くと云ふもをかしやな
我わだつみの一しづく
水より淡き獲物さへ
奪ひ奪はる吳越より
藻くづ引き合ふはらからや
鱗さかたつ親と子は
蟹のはらわたあらくに
蠣の殻にも浪立てよ
涙かゝやく胸の星

血 汐 いる ざる 倉 の 壁
 虫 の 住 家 の 幾 ま さ や
 塵 の 塚 に も 道 つ け て
 あ は れ い つ ま で く り か へ す
 わ づ か な る 業 ぞ 卑 し き
 お ろ か な る 胸 ぞ を か し き
 い つ は り の 聲 ぞ 憎 き
 動 く な ら は 我 の 如
 騒 く な ら は 我 の 如
 六 合 震 ひ 動 か せ や
 宇 宙 亂 し て 騒 け よ や
 天 の 魂
 騒 く と い ふ も 地 の 事 上

静 と い ふ も 地 の 事 上
 天 よ り 見 れ は を か し や な
 人 の 騒 く を あ ざ わ ら ぶ
 山 も 海 も い つ ま で ぞ
 い つ ま で 動 く 静 な る
 見 よ や 天 に は 層 無 く
 い づ く 境 と 限 無 し
 晴 る れ は 青 き 海 の 色
 曇 れ は 高 き 雲 の 山
 風 吹 け は と て 浪 立 た す
 壊 れ は 早 く 立 ち ま さ り
 光 か い や く 日 の 宮 や
 照 ら ぬ 限 無 き 月 の 園

星のちまたのにぎはしく
雪の霰の花舞へは
雨のはやしにいかづちの
車走らすいなづまや
あまの河原の砂清く
虹の橋行くをかしさよ
我より見れば山は豆
海は夜露の余りにて
地とは手鞠のひとつかや
突きて落さす觸れぬ間も
吹かか散りなんあはれさよ
笑はゝ壊る姿かな

山は元より動くに見ゆしが
海は底より震ふと見ゆしが
山立上り海吹て
天打ては天碎け
亂れて散るは月か日か
星か霰か雪か雨
土くれ木の葉浪の花
あなすさまとや面白や
此有様を見るは唯
我ばかりかと云ふ間も無く
飛ひ来る雲の火に乗れば
我も炎と燃て飛ふ

李青蓮

大鵬の賦は成りにけり
楊州の花咲きにけり
牡丹の中に太眞の
ゑみより動く春の風
沈香亭に露散りて
赤き氷は池に解け
光とゞむる明皇の
手折る一枝に酒さめぬ
早くもて早くもて
千古浮ぶるさかづきや
酒星は天にいつも照る

酒泉は地にも涸るゝま
天地を賭けて競ひ飲む
かたきとなるは無きや無き
君召すか君召すか
臣はこれ酒中の仙
遊仙枕は借らすとも
我ふるさとを離れんや
念奴の歌にも飽きにけり
龜年の聲こそをかしけれ
金衣公子しほし待て
飛ひ行く蝶は誰を宿
かざしの花の梅と桃
ふたつに分けて風流の

いくさはいづれ勝つやらん
錦の旗を取るは誰
かれかこれかと見る中を
車引かしてちと來る
臂にこがねの札かけて
酒は斷つとも肥満ちし
腹には何を藏むらん
眼は何を睨むらん
赤き藥を贅として
金鶏の障推しやりつ
旗は我のともてあそぶ
母の乳さへ忘れけん
長生殿に夜深けて

鳥よ枝よと契るとも
君より深きいとし子に
心許すと人は云ふ
わづらはしわづらはし
我酔ひぬ眠らなん
三百盃を過しけん
去れや去れや皆去れや
楚王の雲雨よしやよし
玉山我と倒るなり
蜀道は難くとも
天に登りて月日見ん
また書けとまた書けと
さらは書くへし君見よや

先づ靴脱かせ高力士
楊國忠硯持て
貴妃の口に筆呵して
祿山の面に墨ぬらん
君の眼を通るとも
我筆いかで通れんや
待てと擲つしづくより
變るすがたは金毛の
獅子を躍りて飛ひかゝる
おな恐ろしと倒れ伏す
貴妃を飛ひこゝ君も囁み
尙も進めは白浪は

腰より高く吹上り
牡丹飛ひ散る汐風や
鬣ふるはして鯨寄る
そびらに乗れば青蓮は
天のあなたとなりけり

大雅堂

祇園林を春染めて
山をいろどる土佐の筆
眞葛か原の風香ふ
狩野も酒をや過しけん
酔ふて來りつ酔ふて去る
浮世姿は祐信が
花に衣紋も光琳の
扇鳴らすは誰ならん
夜櫻や夜櫻や
月を忘るゝかゝり火に
うつる舞子の袖赤く

雪を踏み行くむらさきと
歌も浮かるゝ其ぬしの
かぼろは雲の谷ならで
すたれさゝめく三味線の
音は雨にや習ひけん
よしや豆腐は淡くとも
切る手やさしき二軒茶屋
君は西へか東には
やまと歌さへ代々によむ
百合の姿はしほれしが
咲くや娘も十五六
町と名乗れど町に似ぬ
心の玉を誰か砥く

引けど許さぬ青柳の
金に位に糸解かす
金も位も名さへ無き
畫師に盃思ひざし

をかしやなをかしやな
みやげともなる大津畫の
吃に劣りし若者に
何を見とめて與へけん
龍の君さへ錢出さす
水に流るゝ唐様の
文字も似つかぬ看板に
筆は箒とするぞよき

仰け畫馬堂宮寺の
換障子は古法眼

富士には三たび登りけり
またも登らん立山や
白山ふみて三岳の
道は千里を行きしかど
未たによまぬ万卷の
ふみは字無きもまたをかし
水にささみし經よりも
水の綾織る幾まきや
風に傳はる名は聞かで
風の糸無き琴聞けは

瀧も静まる王摩詰
今や樂師となりけん
竹はひらめく鳳凰の
羽は梅花の香かや
六如美人を負ふて去り
かしらかへせど百余年
狂ひ狂はぬ徐文長
猿にはらわた千たび斷つ
雲の林に分け入れは
清閼こそいさぎよき
我は九霞の山探り
中に千古のきこりせん
紀伊の翁はいかづちを

観ては竹枝を歌ふかや
大和の友の色好み
畫の具浪華に流せかし
左近次郎の我儘に
行燈貸さはや鬼出てん
狐走らす謝春星
君は三葉をむさばれど
見よや海には波遠く
雪を乗せ行く小舟あり
溪に空しき音するは
先へ探りし奥やある
我は重荷を捨てにけり
山のいたゞき猶満たす

斧を投くれは天裂けて
落つるものあり誰か知る

妾は蘭を覺ゆけり
梅を教へてたびたまへ
墨は唇染むるとも
君は素顔を厭ふまど
米と春着をかへてより
夏の月まで竹も成り
夕顔描く柵の下
さこそ涼しくあるならめ
秋の風には簪を
投げて聞きなは長き夜に

君が氣高き白菊の
心いつかは解るらん
冬は窓さす雪あかり
紙のふすまは破るとも
松の操は母も知り
なさけ聲ある書も傳ふ
我は聲無き歌よみて
こゝろ石にぞ凝らさなん
鶴を子とするまでもなく
山の奥にも香あり
水に聲合ふつくし琴
君も一ふし歌うたへ

蓬萊山はいづくぞと
思へは遠くなかりけり
三十六の峰々を
行きては歸る我おもひ
鴨の流は淺くとも
取られぬ月の静かさよ
曆にあらぬ花ざかり
たかどの朽ちぬ大雅かな

天狗舞

天王寺の星見すや
天王寺の星見すや
天王寺の妖靈と
田樂法師歌ひけり
鎌倉御所を踏み荒らし
田樂法師舞ひにけり
そもいづくより來りけん
鞍馬の杉は音せねど
比叡の屏風人躍る
都はけふも不禮講

肌は薄衣透せども
中の心を誰か知る
かしら烏帽子を落せども
酌むはいかなる酒ならん

何かある何かある

京さふらひの足弱く
宇治瀬田までもよも出てト
富士川またも鳥立たん
平家は花と散りにけり
太政入道唯一世
源氏は實をぞ収めんと
總追捕使も三代に盡く

三つの鱗の九つも
續く此世の静けさは
さちの神風吹かすとも
太郎殿の膽太く
埋む深雪は解けずとも
肉のふすまに最明寺
障子はすべてまろかねや
青砥の腹の小さよ
厨に溢る酒さかな
鳥は犬にも投げよかし
かばね争ふ聲と聞く
めしきものは酔はせよや
噛みつ倒しつ組みまろぶ

おもしろやおもしろや

舞へや歌へや田樂の

法師と我も歌ふへし

天王寺天王寺

それは遠き津の國や

こゝ鎌倉の星月夜

あかつきまでは尙長し

妖靈も來よ鬼も來よ

天の狗もまたをかし

我こそ狗のかしらなれ

翼はよもの海を打ち

雲も霞も吹きちらし

日の光まで暗くせん

續けや法師皆歌へと
躍り上れば七尺の
草にも足らで落ちにけり
狗はかしらも踏て舞ふ

浪と童ど

みぎは傳ふて只ひとり
浪にたはむる童あり
浪寄り來れば退きて
浪退けは進み行く
みぎはに残す足跡は
浪寄る毎に消ゆにけり
浪寄る毎に消ゆるとも
知らでいよく進みけり
浪はいよくあれにけり
童はいつか影見ぬす

巖島

潮満ちて潮満ちて
鳥居は海の中となり
灯籠叩く浪の花
廻廊浮ふをかしさよ
龍の姫こそ呼ひたけれ
畫馬にはそれと見るは無く
好しと思へは色はけて
濃きは空しき法の文
よるひかぶとも其人も
底の藻屑に埋もれて
誰が手あそびと残りけん

小太刀ぞいとあはれなる
日はまぼしこそとまりけめ
遂には落つるうなぼらの
下にも宮はありといふ
あづま男はよも知らド
年の波さへ寄せて來す
今も珊瑚の木がくれや
鯛やはまぐり追ひまはし
眞珠なげうち遊ふらん
局の髪も洗はれて
磨くすがたは都より
琵琶やよふてふ手に馴れて
能登守さへ笙吹かん

小松の君も招きたや
入道殿は聞かれぬか
見たまへや鶴が岡
宮はかしこも赤けれど
雪を染めたるなごりをや
鬼武の最期も誰か知る
六波羅よりも尙廣き
聚樂の館も跡無くて
こゝにぞ残る千疊の
うてなのぬしはいかにぞや
我のみならぬおきふしを
浪に恨むも甲斐どなき
語らぬ胸も後の世の

わび人ならは知りもせん
涙は我も惜ますと
思へは暮るゝけふの日の
といぬまゝに早入りて
我も一夜と留めもせま

三田尻

船出てゝ波は空しく
見まはせは山に日は落つ
笛吹くは旅の子ならど
筆執るに涙先つ染む

千代の松原

蒙古の船はいづくぞや
五洲につづく海原を
いくたび行きて歸るらん
天地を渡る風長し
こゝは松原千代とかや
一夜萬木折れしかど
生ひてふたゝび色青く
げに千代までのけしきかな
箱崎の宮さびにけり
香椎に憩ふ人も無く
博多に廻る泊り船

高どのよりも招くらん
海も昔は隔てけり
山も一たび遮りし
心かよはす春風や
なれぞ千代まで吹けよかし
あなすさまじき黒雲や
北に起りて雨含み
松も音立てつるぎ砥く
さては嵐となるならん
砂吹きかへす荒浪や
山壊け飛ふ水烟
龍は切られて海散れは
陸もつんざく虎の聲

翌は眠るか春の水
濱もとめや貝拾ふ
雲か騒くは白浪か
測り難きは風ならん
松も千代までいかならん
春はいくたび秋となり
船を浮へつ船碎く
風のこゝろはいつまでぞ

大宰府

鐘鳴るか瓦は見えず
石の色獨り古りたり
見かへれば天拜山
いたゞきの松はいつより
清涼の秋の思は
浅かりしこゝの春より
海越えて梅は來れど
此心翠簾を通さず
北へ行く雁は歸るか

宵の間の月は都ぞ
水底も照らす光の
曇れるは我目濡るゝか
あらかどめおどしすかせし
人は今譏りあざけり
嫉み忌み憎み恐れし
人は今特に笑はん
靴拾ふはトめ思へは
彼もまたつるぎ飛はしぬ
鹿打て花を植ゑては
後宮の春を占めたり

天王寺天を凌けど
蘇我の子は地にも殘らず
宇佐の宮けがれ洗ふて
妖僧の衣も拂はる

春日野の杉をまとふて

年々に藤のさかえや

殿上に臺ははびこり

大臣の職も無さまで

聖賢の障子成りしも

關白の前に聲無し

長慶の集を枕に
我心ふみにありしを

牡丹芳君は眠らす

農桑の憂聞きては

酬いんと筆を捨てしに

琵琶行の人となりけり

門叩くこゝろありせば

など早く遁れ給ひし

君ならで知るはあらぬに

我ならで立つはあらぬに

ころも脱くこゝろありせは
障子洩る風に叩きて
知り給へ民の身よりも
何人に寒氣早きを

熊本城

浪華の城は焼けにけり
天守の跡に我立ては
春の霞どかこむなる
烟るは民のかまどなり
熊本の城焼けにけり
郭の下に我立ては
梅の雨こそ降り來れ
屏に登るは夏の草
甲をかざる鬚いかに

くるがね透す槍いかに
魂はうしろに祭るとも
遠くいづくに迷ふらん

空は晴れても遙なる
西と東をにらみては
槍を杖つき鬚絞る
熱き涙は何やらん

賤か嶽の朝風か
蔚山の夕烟
桃山の夜の火か
それならずそれならず

慶長正に十六年
花のやよひの都より
呼ふは鬼より測られぬ
翁に出合ふ若君や

淀の堤の右ひだり
木にも茅にもこゝろして
馬もいなゝく東寺より
入るや二條の大廣間

北に眩張る阪東の
武者は一目に足らねども

笑顔あやしき言葉には
突かん隙無きあるトかな

酒はめぐりて三盃の
口に甘きは何やらん
呑む懐のつるぎさへ
抜く由も無き苦しさを

君は事無く送り来て
我は所領に歸らんと
君の暇を乞ひし時
あはれ暇を乞ひし時

君のみかほは父君の
若き時よりうるはしく
若き時さへ忍はるゝ
涙に君もくれ給ふ

こは我爲か世の爲か
早知り給ふ豊臣の
末を思ふてたのまゝ
我や何とて別れけん

心は鉄と思へども
石ならぬ身のまゝならず
病の床に倒るゝを

翌と知らるゝくやしきよ

いかで死なんと奮へども

殺すは天か人の意か

劔の山をあとにして

はちすの池に行かれんや

槍は磨て残すとも

思ひのまゝに揮はんや

城は堅めて残すとも

思ひのまゝに保たんや

浪華の城はあなたなり

雲は烟と立たんとす
熊本の城こゝ遠し
風は雨をも呼はんとす

耶馬溪

海士の子は歌をえよます
山がつは書とも眺めず
一幅のくしき山水
頼裏に見出されけり
かもしるや大和の紙に
から筆の跡のたくみは
峰いくつ立ちて天衝き
草も木も俯して地を刺す
落ちかゝる石は裂けたり
登り行く阪はつかす
絶壁の寺は誰住む

幽洞に羅漢いくばく
山の根を穿つ窓あり
車過ぎ馬も行く見ゆ
山影を碎く早瀬に
糸垂るゝ人は何釣る
丸木橋渡る翁や
などまばし立ちて眺めぬ
くさむらに詩囊下しつ
岩踏て見るは我のみ
世に高く名こそきこゆれ
むらがらは山もいとはん
いとふともいつか烟らん
それぞかの人むくいよ

石簪ふかしら打ちふり
我知らず我知らず
騷人のおのが手がらに
ものいはで獨り眺めず
我姿文に寫して
世に流す罪を免さト
我は云ふ杖に叩きて
さらばなど雲に隠れぬ
世にあらは同しいのちや
見ずは捨つ見れば汚して
去ばらくは一とめづるも
はてはまた捨てつ拾ひつ
隠れても追ふて捕へん

顯はるもかへりみもせず
顯はれず故に隠れず
隠れねば顯はれもせず
人見るも人見ぬも
唯高く唯清く
烟るとも獨り守らは
知る人ぞいつか無からん
あらずとも何か嘆かん
舌長き溪ぞはづかし
見よや見よ雲の峯々
世の目には入らずたゞえず
なれよりは優る時あり
なれよりは劣る時あり

劣るとも見れば變りて
優るとも長く残さず
誰が筆や寫す心は
心はたあるやあらぬや

内海行

文字の港を出て、より
周防の灘も浪立たず
髪に戯る風受けて
眉もて送る山見つゝ
行きかふ船にことづてん
人はうしろにあらねども
残る所はまたの秋
歸るころぞ先つ走る
海は右にも左にも
眺め飽かさぬもてなしに
とまるとる港もにくからず

重荷積みこむ徳山や
寄せて宇品に稍遅き
瀬戸は平太のいさをしか
海に立てよも海に入る
罪は陸にも餘りけん
語る外史のふるさとは
峯に劣らぬ島の數
など見すてよは去りにけん
幕ふ程尙つれなきは
生みし所と聞けは知る
廣き海こそ過ぎよけれ
あないと狭き尾の道に
高く光るは烏帽子岩

誰に着よとか寺立てよ
待つとしもなき観音の
水や想ふて岩ばなに
醒る向に酔ふ人は
今に眠りもさめさらん
隣る天女の琵琶絶えて
朝は納まる女君
筆や納めん歌人に
いのち保てと酒すむ
知らぬ翁をねぎらふて
曲る船路は遠からず
島根ねり行く夕烟
讃岐富士にぞ日は落ちて

がげは空しき白浪や
鳥の羽音もいにしへの
いくさおぼゆる屋島かな
水に打たるゝ高松の
城の櫓ぞなど暗き
播磨灘こそ黒くとも
月にあはれる淡路島
かよふ千鳥は明石より
須磨は關無き松風や
蛩も戀知るむらさめに
今もさすらふ人やある
我はみづから身を逐へは
ゆるしなくとも行きかへる

家はいづくと定めねど
待たん所ぞとまりなる
つとは手軽き一筆の
笠の裏書ありや否

高野山

こゝもなほ浮世の中か
ほとゝぎす歸れとぞ鳴く
佛法も今はいかにかや
僧と呼ぶ鳥は聞えず

和歌の浦

春は行きしが和歌の浦
濱朝顔の花開き
鶴は鳴かねど玉津島
雲雀の聲ぞいと高し
不老の橋を過ぎ行けは
紀三井の鐘のあと追ふて
権現宮の阪登る
上に殘の月は待つ

都の歌

あしたの日かげ暮の雨
染めてくれなるひらさきや
霧に霞にかど取れし
山の都はいづくぞや
月の光に雪の色
ときや合して流すらん
泳く魚さへ數知るき
水の都はいづくぞや
春は柳に解けそめて

風もいざなふ山里や
大路小路の末までも
花の都はいづくぞや

秋はくれなる濃き薄き
錦いろく織り出す
霜の氣まゝのにくからぬ
もみちの都はいづくぞや

もみち探れば神垣や
朱の鳥居の色奪ふ
花の上には塔高さ
寺の都はいづくぞや

寺の中にも花散らす
咲くや宮にも筆の跡
ゑりしほとけの光さへ
美術の都はいづくぞや

花の中より生るらん
清きながれに洗はれて
玉のはたえに香添ふ
美女の都はいづくぞや

祭見るとて車見て
花に云ひよるやれがきや

歌もえらべもなまめさし
戀の都はいづくぞや

わびにまなびに道々の
智恵に寄りくるともしびや
文字もかゝやくますらの
名譽の都はいづくぞや

西やひがしや北みなみ
かはりくゝて吹く風に
草木なびかすつはものが
權威の都はいづくぞや

壁もこがねやまろかねの
障子めぐらす高どのに
肉の林や酒の池
榮華の都はいづくぞや

山やながれは時知るや
花にもみちのちりくゝに
權も榮華も戀も名も
墓の都はいづくぞや

三十六峰

木蘭橋に山見れば
三十六と誰よみし
秋の風にも浪立たぬ
峰に埋れし骨いくつ
四明か嶽もかすめるを
何見下して將門が
あらぬ望を起しける
むくいほこゝの土も得ず
遠き越路の雪にちる
はてさへ見えてうきたびに
恨抱きて下り行く

新田の旗も残らぬか
残れど黒き銀閣の
ぬしは固より木なりけり
大文字當れるは
千年の中誰ならん
去ばしかいやく淨海を
はかる去ぐれの鹿が谷
洩るゝ去づくを風吹けは
龍は幾たび動きけん
日かけ乱れて虎の子に
渡す甲斐なき南禪寺
化鳥屢々雲に乗り
絃は鳴りてもまた鳴きて

響く華頂の鐘の聲
祇園精舎も隣かや
眞葛か原の花の色
法師はいづくうかれめを
照す月こそ將軍の
塚の中より出るなれ
下に眠れる詩人にも
近く庵をならべしは
いつもさびしき歌人や
花に猶泣く俳人と
向に笑ふ畫師の名の
有るもをかしき双林寺
藁屋忘れぬ高どのは

影をとめて萩に見る
上に君より國思ふ
骨の林はもみぢして
色を争ふ清水の
車やどりに輿も無く
楓飛ひちる舞臺より
落つる音羽の瀧の水
くみに下るか中山の
歌も戀路の未清く
涙まづかに寺に死ぬ
美人は多くかくやらん
寄れど悲しき灯笼の
かといは早く逝きしかど

残るやからのあはれさの
見ゆる夢には六波羅も
大佛殿も壊るれは
阿彌陀が峰も安からず
震はゞ震へ都より
西も東も動かして
はては南の桃山の
島となるもよしやよし
尽きぬ思はいくばくぞ
三十六と誰よみし

落瓦賦

秋は舊都に立ちにけり
千古落葉となりぬらん
瓦拾へは苦むして
桐か葵か蝶見ぬす

宮も藁屋となりにけり
城に夕日のかげ落ちて
山の古寺暮早く
泣くはつるぎか松風か
我身ひとつと思ひしに

うきはこゝにもありけるか
經の裏見るともしびに
降るはいかなる雨ならん

身こそ心のまゝならね
いかで想は限られん
愁のみ知るかなしさは
むかし想ふて忘れなん

いつまで眠る東山

いよ／＼清き鴨河や

昔を語れ我は今
人と離れてなれを友

朝日將軍源九郎

猿面冠者高平太

榮えしさまはいかならん
奢りしさまはいかならん

脆きは人のこゝろかな

山にかためしつはものも
こゝの春にはとけにけり

藤は都の男かな

花は人より強かりし
罪は花にもなかりしに

花を飾りて色競ふ
男も顔は白かりし

歌は香へど門寒き

梅吹き散らす高笑ひ

黒き男も逐はれけり

鄙に學ふや雛祭

飯をこぼせは跡拾ひ

九年三年八幡の

親子は草を刈りにけり

花を守るはすがめかな

花は嵐を呼ひにけり
酒もくされて盃を
奪ふはらからやからさへ
血汐白河染めにけり

黒き炎は立ちにけり

風は一夜に止みしかど

またも燃えつく藻壁門

鬼は手を打つ六波羅や

虎は荒野へ走りけり

龍も馴れては花に酔ひ

鬮骸叩きて目を招く

父は子よりも若かりし

孫は驚く水鳥の

風に落ち行く秋の葉や

木曾にそだちし深山木も

京のまぐれに染みにけり

色はかはれど堀川に

舞の袖ふる白拍子

まづの小手巻くりかへす

戀の曲こそはてなけれ

誰に習ひし鬼武者は

寄らす來らす來れは去る

あづまの花は針おるに

木の實も早く腐れしに

三つの鱗のなまぐさや

花も血に染め雪汚し

月に照して錢あざる

それも天狗に食はれけり

酒は亂るゝ不禮講

打つや鼓の音高く

破れ裂けても寄り來る

つはものどもは誰々ぞ

河内男は堅くとも
冠似合ふは左中將
それも争ふ足利の
をとひにこそ取られけれ

牛の車の幾めぐり
取れは争ひ人倒し
獨り占めては色に落つ
深くて通ふは執事かや

こがねえろかねうてな立て
君は茶を飲み花ひねる

叛け家増す六分一
三尺坊も鶴飼舞ふ

御所の盃山の脚
こゝに受くれは洲の股や
川はかしこにみなぎりて
車首引く十餘年

宮もまげみとなりけり
築地出て入る犬の子に
破戒頭陀さへ噛まれては
田舎商人毒ひさぐ

箱根の峰に馬立てゝ
人の心を攪るは誰そ
筑摩の川に龍飛て
雲霧裂けつまた結ふ

吉法師吉法師
なれどまことに早かりし
碎く一夜に桶はぎま
美濃は小さし鯉引出

早く起きては早く臥す
短夜告くる一聲や
殺せ殺さんほとゝぎす

塚はいづくぞ本能寺

三日晴れしも山崎に
雨は定まる大徳寺
張るや聚樂の綾錦
織る機の音を今や聞く

三河の鐙に太刀持たし
六十州のものゝふを
寄せて見下す夏の日は
四海はしても足らざりし
草鞋結ふ手に明裂きて

浄土與へん曾呂利より
御所の花はき大茶の湯
利休は娘惜むなり

大佛先に壊れけり
阿彌陀か峯も焼けにけん
烟は上る薄月夜
いしすゑのみぞかたみなる

耳塚いかに残りけん
血天井の痕稍消えて
小町踊や伊勢踊
三百年の春の夢

守る斧の柄朽ちぬ間に
白き碁石は壊れけり
黒き石よりどよめきて
雪と飛ひちる櫻田や

黒船の笛聞えけり
川原に晒す木像に
二つは足せど猶動く
將軍塚の最後かな

山の法師も世を憂ひ
川の詩人も筆を投げ

公卿も太刀抜き馬打て
錦の旗は東指す

都空しくなりにけり
昔と古り行く千年の
春を残すはたをやめや
秋は野山を占めにけり

守りがはなるもみぢより
赤き三十三間の
堂に集まる千体は
いかにいつまでものいはぬ

比叡は近くなりけるに
東寺は町の西となり
龍も飛ひ行く禪堂の
中に高きは阿彌陀佛

空也と鐘は鳴らしゝが
色ある珠数の緒は切れず
妻を抱きて釋迦笑ふ
天竺よりは肌寒し

妙法一夜かゝやけど
蓮華は鳥も飛はしけり
聲はあはれの虚無僧の

編笠何を忍ふらん

葵かさして加茂詣

駒は競へど塵立たず

扇かさして祇園會や

ちどの化粧を美しくしき

神の社の杉古りて

屋根に松生ふ樓門の

朱は剝けても尙朽ちぬ

いつの内匠の作りけん

悪魔睨みて並ひ立つ

仁王は佛師親子とや
無き名傳はる山水は
胸の中にぞ聲ありし

松を叩きし琵琶の音は

白き泉に流れけん

西へ行くともといまりて

文の紫色さめず

捨てし反古さへ拾はれて

人はつれづれならねども

山のいづくに埋もれて

鬼に讀まるゝ文や無き

銀沙梅雨は壊れねど
芭蕉野分に裂け易く
炎草紙を好むなり
水より寒き世の流
残すこゝろはいかならん
心ありても壊さるゝ
地には眼やなかるらん
天の月日も消ゆといふ
聞はふたゝび明るとも
後の光に山見なは

起つか眠るかいやばくの
峯はむかしを知るや否
盡きぬさかえを誰か持つ
朽ちぬ光を想ふては
朽ちし柱に文字ゑれど
落つる瓦に雨洩らん
落つる瓦はよしやよし
文字は心の影ならん
うつゝのうてな朽つるとも
理想の宮ぞいとあかき

一つは有るを抱きては
無きにながらふ心こそ
今も昔にかよふらめ
後もはからず合ふならん

泣くも笑ふも物云はぬ
天に問ふとも甲斐ぞ無き
答へがほなる瀧よりも
胸の泉は盡るまじ

汲めや飲めや我と我
養ふ酒にいざ酔はん
長生殿を我書けば

不老門を人つくれ

嵯峨野

こゝは名に負ふ嵯峨野とや
げにあはれなる秋の色
とこそ知りてか女郎花
露の涙をたゝふぞや

嵐にかよふ琴の音は
牡鹿呼ひよす甲斐も無く
まぐれ待つ間の琵琶の聲
晴るゝ時無きあはれさよ

うき世のうきはうつくしき
 人こそ殊に身には知れ
 うきの故にやうつくしき
 うつくしき故うかるらん
 うきの故にやうつくしき
 さらはうきをも厭ふまど
 うつくしき故うかりせは
 うつくしき故うかりせは
 櫻にほへど春と散る
 淵に沈みし宮女あり
 薄招けど秋に逢ふ

陰に隠れし白拍子

戀もなさけも知るものを
 などや男は捨てにけん
 才もすぐれし女さへ
 草紙枕に眠るなり

こゝろ捨てゝも捨てられぬ
 すがた清きは誰爲や
 野邊の花さへ名にめでゝ
 手折る法師も落ちにけり
 心ひきては罪となり

罪と知りても罪つくる
罪はいづくに盡くるらん
罪は此世のいのちかな

かよへ百夜も百とせの
髪に雪こそ積るとも
花と思ふて埋るらん
なさけ知らぬぞなさけなる

罪かめぐみか生死の
後のすがたはいかならん
塚を拂ふて跡見れば
月も嵐の山に消ゆ

罽 罽 盃

罽罽に盛りたるうまさけをかしや
罽罽に盛りたる葡萄のうまさけ
たしまぬ我さへ罽罽のさかづき
飲まばや飲まばや飽くまで飲まばや

一口飲めは俗物いづく
二口飲めは天地はいづく
いでく舞はん汝も舞へや
見よくよもに影だにあらず
英雄奸物才子も馬鹿も
聲無し色無し萬有空し
立ち舞ふ我とさかづきばかり

聲有り聲無し
色有り色無し
香有り香無し
光有り光無し
影有り影無し
名有り名無し
性有り性無し
情有り情無し
心有り心無し
命有り命無し
我有り我無し
汝有り汝無し
始有り始無し

葡萄 葡萄 罽
盛りたり罽
盛りたり罽
も立てや罽
も踊れ
燃 開 葡萄 葡萄
やせふたふびこるの花びら
おもしろやこちよや
飲めは酔ふ酔へは舞ふ
酔郷か仙郷か
幻郷か魔郷か
美しくしや美しくしや
何やらん舞ひ歌ふ
姿有り姿無し
言葉有り言葉無し

汝も 閻魔のさかづき 閻魔のさかづき
唯のさかづき 閻魔のさかづき
のさかづき 閻魔のさかづき
さかづき 閻魔のさかづき
なりけり

かかふふ 葡萄 閻魔
ののたた 萄は 魔の
も聲たた はさ 魔の
のこゝび びさ 魔の
いこの 天地 たり 魔の
づく 名と 呼ひ 利と 呼ふ
ぞか 呼ひ 利と 呼ふ
のの のの のの のの
もの づく ぞ

終有り終無し
常有り常無し
變有り變無し
道有り道無し
法有り法無し
美しくしや何やらん
何やらん美しくしや

天馬賦

鯨に乗て海行けは
李白は酔ふて落ちにけり
脚の翼に跨れば
莊周いねて共に來す
月の桂の枝折て
空行く駒に鞭うたん
立つは何立つは何
雲か山か砂風か
春の霞か秋の霧
モスカウの町の火か
阿房の宮を焼く烟

ニロのたはむれ平八の
怒に燃ゆる炎かや
それはあなすそれならず
息より淡く消ゆるなり
消ゆる事無くいつも立つ
こは誰がわさや星を吹き
月をくもらし日に迫る
あやしき姿いでや見ん
駒も躍れば雲飛て
烟漸く現はるゝ
炎逆巻く大紅蓮
大焦熱の底よ泣く

虫か魚か鳥けもの
人はいかなる人ならん
親をうちける義朝も
親に見殺せし政子より
子に汚れける常盤さへ
夫に代りし袈裟御前
妻を斬りける吳將軍
兄と焼かれしさはひめも
弟追ひける頼朝も
友を知りける鮑叔も
友を刺しけるブルタスも
君を弑せし王莽も

君に勤めし正成も
國を建てけるワシントン
國を破りしナポレオン
民を救ひし宗五郎
民を壓へし始皇帝
人をかすめし盜跖も
人に教へし孔丘も
釋迦もイエスも別ちなく
同し烟に包まれて
泣くも笑ふも物いはぬ
口にも入るや毒の種
眼くらますくれなるの
炎の車誰か引く

羨ゆる涙の音消えて
ひせぶ烟に色變り
骨もこがれて一つらや
散り行く魂を引きとめて
塵にひねれはまたかへす
生死の海のぬしは誰そ
生死の業のあても無く
善きも悪きも認めず
福も禍定めなく
私無きは道も無き
空しき道に道立つる
人こそ彼に優るらめ
彼より罪を正さずば

炎の中に立たれま
白き光に照し見よ
鬼はいかなる鬼ならん
車叩けはまるび落ち
共に焼かるゝ衣脱けは
天馬叫て飛上り
烟出つればまた烟る
車はいくつ千よるづや
めぐりめぐりて果も無き
中には人も盡きにけん
始は誰か住みにけん
水も乾きつ山焼けて
残る烟や立つ炎

いかにいつまで動くらん
引きつ引かるゝ大空や
地こそ小さく淡くとも
天も心に飽き足らず
頭叩けは想飛ひ
出る烟や雲の外
霞わくれば花舞ふて
霧は漸く紅の
雨にさえづる紫の
鳥はいづくを指すやらん
光る林は草白く
みのる木の實はまろかねや
こがね流れて波も無く

島は緑の岩めぐり
上り下るや水晶の
阪は千里と限無き
向真白き大門に
額は掲げて眞の字や
またもまはれは朱の門
こゝには善の額高し
我はかなたとまたまはる
紫招く美の門や
推さねど開く白玉の
二層三層高どのは
四つか五つか廻廊の
中のうてなぞいと廣く

壁にかきしは誰が歌を
障子に描く筆の跡
寄れはきらめき去れは見ゆ
我目を何に洗はなん
香ふ水吹く龍に乗る
女体漸く見定めて
聞けはいづくぞ笛の音に
二人三人舞ふて来る
をとめは遂に數知れず
揃ふ衣や虹の影
一人歌へは聲合せ
かはるまらべは常盤木の
琴か胡弓か笙添へて

響盡きせぬ天津風
かざす桂も飛へど舞ふ
袖を洩るゝは梅か香か
立つやもすそに春かすみ
帯は雲ともなるやらん
鬢のまづくは露となり
さす手ひく手に雪ちれは
霜も満ちたる天井に
床は氷を磨くらん
我は我身を忘れけり
いつか交りて立ち舞へは
つらは乱れてくづれ行く
跡を慕ふて長橋や

春	大	眞	公	文	遠	重	書	壽	金	
雪	壺	田		覺	藤		師		字	
	中	幸		法	武		日			
集	齊	村	曉	師者盛		記	體	塔		高安月郊作
					三連劇詩		全	全	小	説
新	全	全	悲壯劇詩							
休										
詩										
歌										
俳										
句										
	全	全	全	全	近	既	全	近	既	
					刊	刊		刊	刊	

過くる渡殿細殿の
 あなたこなたの壺に入り
 茂る桂の林より
 奥の園には三つの道
 茲に相合ふさばはしや
 前の宮こそ尊けれ
 翠簾は垂れても透き通り
 光ゆらめく中にます
 神はいかなる神ならん
 我は言葉を忘れけり

明治三十三年十二月七日印刷 上製金六十錢
明治三十三年十二月十三日發行 並製金四十錢

著作兼發行者

京都市上京區東三本木南町八番戶 高安三郎

印刷者

大阪市東區本町一丁目三十番屋敷 淺野庄太郎

印刷所

大阪市東區本町一丁目三十番屋敷 大阪國文社

取次所

大阪市東區南本町四丁目三十六番屋敷 金尾文淵堂

不許複製

